

Bagatelle Op.126-5、ト長調のバガテルとの曲紹介。調性を全く考えたことがなかったので、軽い不意打ち、リクエスト主として失格かしら。さらっとシンプル飾り気なし、清楚な出で立ちのピアノ、作品の意味、ちょっとしたものの文字通り、楽譜ではそうなのか。大切なものを慈しむ様に包み込む、優しげで穏やかなスペースが開ける、本来の姿を教えていただく。もっとエモーショナルなものを期待、私の恣意的思い入れはお門違い。

作品126の6つのバガテル、最初はリヒテルさんのライブにて、そのうちの2曲(1番と4番?)をアンコールとして。1974年の金沢、ベートーヴェンの最後の3つのソナタの後に、クラシックを聴くようになって、最初の本格的な演奏会。ピアノのダイナミックな響き、飛行機の爆音みたく心地よく圧倒、変奏曲のトリルの盛り上がりで戦慄、ライブ第一義のキッカケ。アンコール曲、緊張続きのプログラムからのオアシス、ホッと一息リラックス。曲名は謎のまま、年の暮れのテレビだったか、来日演奏家特集で放映、それで知り得た思い出。

その頃発売のグールドさんのレコードを何度も、オブラート面取りなしの演奏家の意図がリアルな録音、独特な緩徐感覚遅いテンポ。また、エッシェンバッハさんの録音にベツタリ、作曲家の後期ソナタ集2枚組に含まれる、苦悩を際立たせる演奏に心酔。いつの間にか、私にとって、5曲目は4曲目までの反歌、かつ超然とした悟りや諦観の境地。31番の嘆きの歌や29番のおどろおどろしいアンダンテ、その次の立ち位置。ディアベルリ変奏曲の29変奏以降然り、ゆっくりとしたテンポでコブシをつけてロずさみそう。ただし、10年ほど前のコヴァセヴィッチさんのライブ、ロマンチックの思い入れはなくありのまま、ごく自然な整然さ。今日改めて本性を示唆、その存在感の重みにて、「エリーゼのため」の魅力が褪せそう。私にとって、インディアン・サマー的ほろ苦さ。

歌については殆ど聴かないためわからない。「城が島の雨」については歌詞を少し知っているだけ、「ハバネラ」はメロディーだけがなんとかという状態。メゾソプラノの安念さん、お腹の底からの発声、総ての作品でズンとストレートにメッセージが伝わってくる、大きな個性に感謝。(2013.7.1)

中田喜直：むこうむこう

梁田 貞：城ヶ島の雨

小林秀雄：落葉松

ベートーヴェン：バガテルト長調 Op.126-5

ベートーヴェン：バガテル イ短調 WoO.59「エリーゼのために」

ビゼー：「カルメン」より

---

【メゾソプラノ】安念千恵子

---